

南條先生の著書解説

泉 芳 環

南條先生の著書既刊未刊を通じて四十九種を數ふ。これは昭和二年十一月大谷大學圖書館に於て展觀されたものである。尤も僧墨遺稿、雲嶂遺稿、修養の栞の三部は展觀を缺くこのことであつた。教界學界の巨擘南條先生としては、四十九部の著作は數に於てあまり多いといふ程ではない。蓋しこれも先生の性格「述而不作」といふ風であつたことに起因するものと思はれる。

今予はこの四十餘種の先生の著書に就て概觀して見ようと思ふ。齊しく著書といふ中にも先生單獨の自著もあり、他人と共働に成れる共著もある。又他人の作品を先生が整理編成せられたものもあれば、他人が整理編成した作品に先

生が名前を附與せられたものもある。これらの形式に準じて分類すれば、自著、共著、自編、及他編となる。然し今はこの分類に依らず、直ちに書物の内容に就て研究、修養、詩文、傳記の四種に分類することとする。

○ 第一研究に屬するものには(A)翻譯と(B)校訂と(C)講義との三種を分たねばならぬ。

(A)翻譯

(一)英譯大明三藏聖教目錄

The Catalogue of the Chinese translation of the Buddhist Tripitaka, the sacred canon of the Buddhists in China and Japan.

明治十六年(1883)英國 Oxford, Clarendon

Press 出版。

南條先生の名をして最も世界的ならしめた著作物と云へばどうしても此の書を挙げねばならぬ。これは明治十三年先生三十二歳の九月頃から起草せられたものらしい。それはこの頃先生はオックスフォードからロンドンに移り、毎日のインデア、オフイスの圖書館に通ひ、その所藏にかゝるかの岩倉具視公寄贈の黄檗版一切經を閲覽せられた。十月以後牛津に在りて孜孜として整理に没頭せられ、翌年の一二月の交、草本成つてマックスミューラー博士の許へ提出せられた。

これに先だつこと數年以前、當時歐洲に於ける支那佛教研究の唯一者なるかのサミュエル・ブルは佛教三藏論(Buddhist Tripiṭaka, 1876)を著はしてこの明藏黄檗版一切經の解題を試み、世に行はれてゐた。然しこの目錄解題は排列の順序に錯誤あり、不精確、不完全、未だ信頼を以て學者の凡邊に上すことはできぬ。それで學界は一層精確にして周到なる學的價值ある目錄

解題の出現せんことを切望して止まなかつた。師マックスミューレルも恐らくこの意を以て先生を慫慂しこの事業を懇囑したものであらう。

この著作の主要なる點は、至元法寶勘同錄所出の經題梵名に據り、一方歐洲從來の研究を參酌して一切經の梵題を及ぶ限り精確に證定したること、次に支那歷代の經錄に依りて譯經の年代を明記せしこと、譯經諸家の列傳を年次を逐ひて、簡約に並記せしこと等で、佛教研究の上に貴重なる資料を供給したものと謂ふべきである。現代の進歩せる佛教學より見る時は勿論幾多の訂正すべき箇所もあり、増補すべき部分もあるが、その權威、その價值は今尙ほ學界に重きをなして居る。

先生は明治十五年一月以後更に草本の再治に没頭せられた。越えて明治十六年四月に至り、漸く出版せられたのである。この時大學印刷局は刊本十部と英貨壹百磅を、稿料として先生に贈つた。先生はこの金額全部を圖書の購入に充てられた。明治十七年三月十八日、オックスフ

オード大學は先生に名譽學位を贈つた。

この著作一たび出で、學界はもはやビールの目錄には一顧をも與へぬやうになつた。それのみならず、歐洲學者にして何か佛教經典の支那譯に言及し、若しくはこれを引用せんとする場合は、必ず南條何番と先生の目錄の經題番號を附記するといふ慣例が出来上つてしまつた。先生の名が歐米學者の誰にも彼にも知れ渡るやうになつたのには、この著作は最も都合のいゝものであつた。現今ではこの書絶版に屬し、賣價は二十磅を唱へて居る。そのうち翻刻せらるゝ筈のごとも聞いたやうだが如何かしらぬ。望むらくは日本で更に増補訂正して出版したいものである。

先生は明治十四年牛津大學所藏の支那日本の書籍目錄を編纂せられた。このことは、マツクスミューレル全集第二卷の先生自傳に見てゐる。

(二) 英譯十二宗綱要

南條先生の著書解説

The Short History of Twelve Japanese Buddhist Sects.

明治十九年九月 東京 佛教書英譯出版會

この書は日本佛教を紹介したものととして最初のものであらう。明治十七年十二月大阪佐野正道氏の囑により、佛教各宗の専門家の執筆になりし教義綱要を英譯せられたものであるが、當時にありては唯一のものであつた。この稿料五拾圓であつたといふ話だ。これに次いで藤島了隱氏の日本佛教が明治廿二年パリで出版せられ黒田眞洞氏の大乗佛教大意等も出た。山上曹源氏の大乗佛教體系、鈴木大拙氏の大乗佛教概論禪佛教等日本佛教の教理も追々歐米に紹介せられつゝある。

本書の價値は佛教の術語を根本の梵語に還元し周到なる索引を附せる點にある。然し歐洲の人がこれで日本佛教を理解することは到底不可能であつた。この方面に於て學徒は愈先生の遺志に乖かぬやう奮勵努力せねばならぬ。

(三)和英 典

明治十九年

この書は本稿冒頭の範疇に當てると他編に屬するものである。菊版の小冊子、蓋し和英辭典としてかなり古いものであらう。卷頭に先生の序がある。漢文を以て書かれ、友人某がこの辭典を編した云々の語が見えてゐる。然も先生の名を以て出版せられてゐる。

(四)和英辭典

明治二十九年 東京 三省堂出版

これは四六版革表紙の、かなり體裁を整へたもので、我々が英語を勉強し始めた當時、南條さんの辭引といふ名で通つてゐたものだつた。標題は左の通である。

Webster's unabridged Dictionary of the English Language translated into Japanese by a committee and edited by F. Warrington Eastlake and Ichiro Tanahashi, revised and extended by Fumio Nanjo, Bungakuhakushi, M. A.

これによると先生はこの辭典の訂正増補に關られたことになつてゐる。然しこれも聞く所によれば全く他編であつて、實際何等先生は關らないとのことである。

此に先生の名がフミオとなつてゐるが、これを以て見ても先生がこの辭典にあまり關係せられなかつたことが察せられる。先生の名文雄はブンユウであつて、先生自身では決してフミオと讀まれたことはない。自叙傳二十四頁に左の一節がある。

『九月初旬、嚴如上人東京より歸りたまひ、一日、宴に待せしに、余は隅に坐せり、其時上人は、其小僧は誰れ歟と尋ねたまひしに、人ありて、此れは憶念寺でありますと申し上げしに、何國の憶念寺かの御尋ねありしに、其人は越前の憶念寺でありますと答へしに、「越前の憶念寺は神興でありて、今は北海道巡回中の筈なれば、任職にあらざるものは其名を云へ」との御注意ありしに、其人は、「此れは文雄と申します」と云ふや否や、上人は笑て

「蚊のやうな名ぢや」とのたまへり。此れは京都にて、蚊が耳邊に近づく時「ブンと云ふて來た」と云ふが故に、戯れたまひしことゝ存せらるゝなり。』

先生が英國滯留中は Buryu Nanjio の署名を用ひられたことも周知の事實である。これは長母音に符號を附する繁を省くため恚うした綴字を用ひられたのである。今に西洋の書物ではこの名で通つてゐる。當時にあつては日本人が珍らしくブンユーナンジョーと云へば日本人といふことかのやうに小兒等が思つてゐたといふ話柄も残つてゐる。然し日本人の中にはファミオと讀むものも間々ありて、頭文字がビーになるかエフになるかの相違のために、銀行の金銭受取などで問題となり、迷惑せられたこともあつたやうに聞く。東京帝大の講師であつたフロレンツは二者を混同して常にブンユーナンジョーと呼んでゐたといふことだ。

(五) 佛教聖典

南條先生の著書解説

明治三十八年 南條前田共編 東京 三省堂出版
これも他編に屬するもの、尤も監修などゝ云ふ名義で當人もあまり關係せぬ書物の編纂が流行つた時代の産物の一である。前田慧雲博士と東西本願寺の大立物であつた當時の状態を看取すべき材料であらう。

(六) 帝國百科全書 比較宗教學

第百六十一編 東京 博文館出版
明治四十年

これはマックスミュレルの著作 The Science of Religion の邦譯である。譯者は某氏、先生は名を貸與せられたに過ぎない。この出版當時學生上りだつた予は、極めて素朴に譯者の名を人に話したところ、其人から非常に抗議せられたやうなことを記憶してゐる。この時分には知名の學者の名で以て書物を出すといふことが書肆の販賣政策として有効だつたので、不氣で恚うしたことが行はれた。如何したつてこれは正しいことではない。先生もその後この種のことには警戒せられるやうになつた。

(七) 佛說無量壽經梵文和譯支那五譯對照
佛說阿彌陀經梵文和譯支那二譯對照

明治四十一年四月 東京 無我山房出版

書物も多い中にこの位長い標題は一寸珍らしい。この書は大小經の梵文和譯に支那譯の相當する文面を對照したものである。大小二經の梵文は既に明治十六年五月にオックスフォード大學印書局で出版され、その十二月には英譯稿成れりと記載されて居る。この和譯の稿本は明治廿二年に出來てゐる。然るにそれが明治四十一年まで殆んど二十年に垂んとする間先生の筐底に藏せられて世に出でなかつたことは注意すべき事だ。序には「之れを刊行せんと欲せしも故ありて果さず」とある。傳ふるところによれば梵文無量壽經は因願の缺如や其他種々の點に於て現今宗門に依用されてゐる譯本との間に一致を缺くので、一宗の教義の上に紛議を生ずる虞ありと認められ、宗門内部の長老達がこの出版を阻止したといふ事である。事の眞偽は固より予之れを保證し得ない。然しながら今から三十

年も前の教界では全くありさうなことである。予は明治三十五六年のころ先生に就て梵文無量壽經の講義を聽いた。その時先生は座右にこの稿本を備へて居られた。それを借覽して謄寫したいと思つて懇願したけれども手許から離されぬからと云ふので許されなかつた。予は子安善義氏の謄寫本を謄寫したのであつた。それだけにこの書の出版が予の興味を惹いたのであつた。

(八) 梵漢 對照 新譯法華經

大正二年 京都 法藏館出版

これは明治三十六年雜誌無盡燈の附録として先生が梵本から翻譯を始められた。何分雜誌のことで、毎月の掲載量に限りがあるので、先生が布教のために東奔西走で忙しいのと、それやこれやで二頁乃至六頁位が出て行く有様、進捗甚だ遅々として何時になつたら完成するやらと思はせたものだ。明治四十年の十月予は先生から「この翻譯も課程の一にしたらよからう」と云

ふて先生の手寫の梵文二冊を手渡された。予は本書五百三十二頁のうち二百四十八頁の六行目から先生の業を引繼いで執筆した。それまでは先生が多忙の中から翻譯せられたものである。

予は先生の業を引繼いだものゝ、やはり自分の他の研究もあり、進歩は依然遅々としてはかざらなかつた。先生にこのことを訴へると、いつも先生は笑ひながら「法華經は八年間の御說法だと云ふから、八年位はかゝるだらう」と云はれるのであつた。大正元年に京都で漸く脱稿したので、尋源會の出版部と法藏館とで出資して出版することゝなつた。この書名は今も故人となつた法藏館主西村七兵衛君の提案である。予が自分の名を署した書物を出したのは抑もこれが最初である。随つて先生との共著であると共に予の處女出版である。予は本書若干部と金拾圓の稿料を貰つたことを記憶する。

その後この版權は平樂寺書店に移り、今該書店から改版されて行はれてゐる。

(九) 邦 譯 梵文入楞伽經

昭和二年二月 南條先生古稀記念祝賀會

これも予と先生の共著である。然し乍ら予は始め楞伽經を翻譯しようと思つてゐなかつた。何となれば大谷大學で梵文入楞伽經の出版が始められた時、先生は校正刷の出る毎に逐次これが邦譯の稿を作つてゐられたのを知つてゐる。だから原典の出版が完成の日には邦譯の原稿も完成して先生の身邊に存在した筈である。

然るに大正十二年四月、先生は福井別院巡錫の途、疾を發せられ、爾來竟に健康回復を見るに至らなんだ。それでその邦譯草稿の所在に就て予はその後先生の僑居東六條丹平旅館に臨み再三先生の荷物を檢してその搜索を試みたが、終に發見することができなかつた。恐らく何かの時にそれは先生の荷物の中へ入れられて東京の御宅の方へ行つてゐたのであるまいか。何分その年の九月あの大震災で、先生の邸宅藏書共に烏有に歸した今日では確める術もない。漸く後半の偈頌品だけの草稿を大谷大學々長室に

發見したので、それを東京に送つて先生に清書を請ひ、前半の分は靜養中の先生を煩す事も到底不可能であつたので、予自からこの翻譯に當らんと決心し、それを先生に申し出でたところ先生もこれを快諾し、偶頌品の清書と原典第一頁の翻譯を自書して予の許に送り、續いて翻譯を作るやうに委嘱せられた。予は大正十三年と十四年の夏季休暇を、この翻譯のために奉仕した。本文二百二十二頁の中、前半百五十頁は予の翻譯にかゝるものである。

出版に就ては田代重右衛門氏の補助を得、南條先生古稀記念祝賀會の名の下に、京都ミツビシ書店主野口新七氏の斡旋を以て公刊された。これが先生の研究的作物の最後のものである。

(B) 校 訂

(10) 梵文金剛經 *Vajracchedikā*

明治十四年 牛津クラレンドン印書局出版、牛津逸書

印度部第一の一

この牛津逸書といふのは *Anecdota Oxoniensia*

のことで牛津大學の所藏にかゝる諸種の寫本文献を出版する叢書である。その中 *Aryan series* の第一巻の第一としてマックスミユールが、*Buddhist Texts from Japan* と題して校訂出版したのがこの梵文金剛經である。校訂はマックスミユールであるが前後の事情は南條先生と密接に關聯してゐるからこれを先生の著書の中に附屬せしめて解説する。

明治十二年二月先生は紹介を以てマックスミユールの許に到り、佛教梵語學專攻の希望を陳べられた。その時マックスミユールは先生を書齋に導き、一巻の書物を先生に示した。それは日本で出版された梵語千字文であつた。この書はエドキンスと云ふ人が横濱でナタンブラウンと云ふ人の手から得たものである。それがエドキンスからマックスミユールの手に渡された。マックスミユールはこの梵語千字文を見て日本にはきつと何か他にも梵語の書物なり寫本なりが存在せねばならぬと思ひ、この時南條先生に日本梵語原典を搜索するやうに勧め、

その結果五種の梵本と若干の陀羅尼が日本から送られた。五種の梵本とは(一)阿彌陀經梵本、(二)金剛經梵本、(三)般若心經梵本略本、(四)同廣本、(五)普賢行願讚梵本である。この中彼は先づ阿彌陀經梵本——それは安永二年の常明開版の本であつたらしい——を校訂して、一八八〇年四月 The Journal of the Royal Asiatic Society に發表した。これを讀んだ Wylie さんがふ人から書面を寄越して日本で得た若干の梵文書類を提供して來た。その中に金剛經の梵本があつた。これは支那で出版されたものであつた。それから又 Baron de Rosen さんがふ人から西藏所傳の金剛經梵本を得、これら數種のものによつて校訂せられたのがこの書である。尤も日本の梵文は二部である。其一は金松空賢氏が高貴寺の藏本を謄寫せしもの、これは梵文を直書しその右行に漢字の直譯を附し、左の一行には羅什と笈多の二譯を並書してゐる。これは梵學津梁第三百二十卷である。その二は Sadow さんがふ人からマックスミューレルに贈つた寫本で唯

梵文のみを横書にしてある。これは高貴寺の伎人戒心氏の手寫であらうといふことだ。尙ほこれら梵本搜索に關する詳細の報告は載せて本書の始に「日本發見の佛敎原典」と題したる論文の中に見れてゐる。

(一) 梵文無量壽經阿彌陀經 Suktāvāṭyūṭha

明治十六年五月 牛津クラレンドン印書局出版、牛津
逸書印度部第一の二

先生の名を不朽ならしめた著作は何と云つても三藏目錄と、この梵文大小二經であらう。彼は即ち歐洲の佛敎研究家の間に、是は即ち日本の佛敎界に共に青天の霹靂であつて、劃紀元をなすものである。尤もこれはマックスミューレルとの共著である。又笠原研壽氏の共働もあつたことは當然である。何しろ眞宗所依の三部經が、その二つまで原典の校訂出版を得たのである。先生の多年の苦心はこの一事を以ても十分に酬いられたと謂つて可なりだ。然しながらこの無量壽經の方の校訂は今日の學界から見れば

未だ十分とは云ひ難い。それは底本となつた寫

本がネパール出土の惡本であつた事にもよるが西藏譯との比較が十分になされてゐない。それで大正六七年に亘つて宗教研究に荻原博士は梵文無量壽經批議を公にし、この校訂に就て縱横に添削を施してゐる。尤もこの書の序言にマツクスミューレルも言つてゐる如く、彼一已の考としては更に善本を得ざる限りこの出版は見合せたいと、流石のマツクスミューレルも匙を投げたのであつたが、南條、笠原の懇望黙止し難く、遂に意を決してかの惡本を根抵となし、出來得る限りの修正を試み、不満足ながら出版したといふのである。

然し現在のごころ善本の據るべきものも發見せられず、また將來發見されさうにも思はれない。只西藏譯は準梵本とも云ふべき逐語譯であり、而も全くこの梵本と吻合するから現在としてはせめて西藏譯と詳細に比較検討して幾分これを修正した校訂本を出すべきであらう。これが目下學徒の前に提供されてゐる事業の一であ

らねばならぬ。

然し先生の校訂に對する忠實さと努力とは恐らく何人も企て及ばないものがある。この點に於てこの書は永遠に學界に於て輝くであらうことは疑を容るゝ餘地がない。尙ほ歸朝後阿彌陀經梵本を木版で出されたのがある。

(二)古代貝葉 Ancient Palm-leaves

明治十七年 牛津クラレンドン印書局出版、牛津逸書
印度部第一の三

これも先生ごマツクスミューレルの共著である。この中には廣略二本の梵文般若心經、尊勝陀羅尼の校訂出版が收められてゐる。これは法隆寺の貝葉を底本としたもので、當時世界最古の梵本として天下に名を馳せたものである。然し其の後中央亞細亞地方からパウイ寫經が發見されて以來、法隆寺貝葉は年代に於て第二位に落ちた。然しこの貴重な資料を日本が世界の學壇へ寄與し得たといふことは確かに日本の誇であり、これを詳細に研究した中古の日本梵學者

慈雲や法護は必ずや地下に歡悅したことであらう。

卷末にビユラーの梵字考を附録としてある。これ亦讀むべき文字である。

(三) 梵文法華經 *Saddharmapundarika*

大正元年出版完成 露都學士院藏版

先生の歸朝後の業績として第一に擧ぐべきものはこの校訂出版である。明治十五年ブリテイッシュ博物館に於て一部分これを謄寫した。後ローヤル亞細亞學會の一本により笠原氏と全部を謄寫し、これをケムブリツチ大學の三本を以て校訂したものが先生所持の寫本であつた。明治三十七八年の頃、高楠博士の仲介でオランダの學匠ケールンと先生とは共働して露都の學士院からこの經典を出版するといふ協定が成立した。それで先生は全部を清書してケールンに提供し、それが明治四十一年に第一卷となつて現はれ、翌年には第二第三卷、その翌年には第四卷、大正元年には第五卷を出して完成した。先

生の謄寫本は間版あひの洋罫紙に書いた厚さ一寸五分程のノウト三冊になつてゐた。朱書、紫書、塗抹縦横の有様は苦心の程を雄辯に物語るものであつた。予の邦譯はこノウトから作つたものである。この謄寫本は震災で焼けてしまつたらしう。

予はこの校訂に關しケールンと先生との間に種々校訂意見の詳細な書信が交換されてゐたのを記憶してゐる。今やケールンも先生も亡し、唯この遺編のみが學界を照してゐる。

(四) 梵文入楞伽經 *Lankavatara*

大正十二年六月 南條先生古稀記念會出版 大谷大學藏版

梵文入楞伽經は明治十五牛十二月から翌年の六月にかけて先生が牛津滞在の間にロンドン亞細亞學會所藏の寫本から謄寫せられ、越えて十月ケムブリツチ大學所藏の寫本を以て校合せられたものが底本となつたのである。其後河口將來本、高楠將來の貝葉の零本とも校合し、かく

て稿本の完成を見たのである。これが出版に際しては月見覺了氏の斡旋で田代重右衛門氏の出資を請ひ、日本に未だ曾て企てられざりし梵文字母の製作を敢行し、植字、組版には専ら足立現誠氏、加藤潔氏これに當り、藤岡了淳氏亦其の間にありて種々盡力する所あり、一方に荻原博士は西藏譯との對校によりて少からざる梵文の修正をなし、かくて約七八年の星霜を経てこの希有なる一大出版が成就したのである。予はこの事業の當初劃策に就て若干の微力を盡したるも、其の後外遊のためにこの事業に親近するを得ず。排印製本の雑事は總て足立現誠氏を頼はした。足立加藤二氏の盡瘁微りせばこの書は到底世に出でなかつたことは疑ない。

梵文金光明經は明治十四年パリ *Bibliothèque Nationale* の寫本から前半を謄寫し、明治十六年ローヤル亞細亞學會の寫本を以て後半を添ね後ケムブリツチの寫本を以て校合し、後河口將來の梵本、京都大學所藏の梵本と校合したものが先生手寫の草稿である。それは開版洋野紙のノウト四冊より成る二百六十五葉の一部である。尤もこれは諸處甚だ難解の部分もあり、出版には多少の手入れを要する。然し、先生は大正四年八月にこの稿本を淨書せられたので、これは我々の前に殘された先生の事業であらねばならぬ。予は大正十二年以來この稿本に就て先づ邦譯を作り、櫻部文鏡氏を頼はして西藏譯の對校をなし、本文を修正しつゝ、植字、組版に従ひ、學生太宰不二丸、須佐晋龍二君の助力を得て約百頁の組版を終つた。邦譯は始んど終に垂んとしてゐる。近き將來に於てこの校訂出版は學界に出るであらうと信ずる。

(二五)梵文金光明經 *Suvarnaprabhāṣā*

未刊稿本 先生自筆

校訂に就て附言すべきは、先生にはこの外に

佛所行讚の謄寫、普賢行願讚の校訂もある。然し前者は Cowell の名を以て公刊せられ、後者に就ては聞く所なし。邊渡海旭氏が獨の日の業蹟の一に後者がある。その間の關係の有無は詳かにせぬ。恐らく關係はないだらう。

(C) 講義

(二六) 令知會雜誌所載論文

明治十七八年より二十年頃に至る

これは著書の形式になつてゐない。然し歸朝當時の先生の風采を窺ふに足るべき好箇の文獻である。令知會雜誌は當時の學界を指導したものである。

印度哲學數論の綱領

新書籍英佛より來る

錫蘭島グネラトネ氏の書狀譯 付雲照律師の問
梵語文法の一斑を記して佛教門中文學の人に
告ぐ

文法起原へ(明治十九年一月文法會にて演説)

佛教の眞理

南條先生の著書解説

佛涅槃年代考

印度紙葉考

歐洲梵語學略史

六合釋略辨

印度佛陀伽耶菩提樹片略史

梵文大經の話

印度の勢力今尙印度に現存す

印度佛陀伽耶に於て發見せられたる二碑の漢文

(二七) 六合釋講辨傍聽記

明治二十一年 京都 西村七兵衛出版

小本にて木版を以て印刷したものである。

(二八) 軍勅輸衍義

明治二十九年 非賣品

(二九) 佛教通 梵文阿彌陀經

俗講義 明治三十年九月 東京 光融館發行

(二〇) 梵文無量壽經大意 大日本佛教青年會
佛教講話録の内

明治三十五年 夏期講習會印刷

(二一) 梵學講義(哲學館講義録)

明治三十八年十二月發行

(二二) 報恩講式歎徳文講義

明治四十一年 播磨佛教講習會發行 西村七兵衛印刷

(二三) 佛說無量壽經講録

明治四十一年 高倉大學寮出版

(二四) 大方禮經四譯對照

大正二年 東京 原子廣宣發行

これは講義用として印刷されたる講本である。

(二五) 佛說阿彌陀經講録

大正五年 大谷派本願寺出版

(二六) 眞宗聖教に顯はれたる梵語講義

大正五年 佛教通信講義の内

第二修養に關するもの。

(二七) 南條、村三博士講演集

明治三十五年發行

佛教文學—嚴護法域—行道進徳—彼岸—京濱
佛教徒懇話會席上談話—命は義によりて輕し

(二八) 感想録

明治三十九年 東京井洸堂發行

(二九) 修養録

右に同じ

(三〇) 三寶章(叡山講演集の内)速記

明治四十年八月十六日

(三一) 忘已録

明治四十年 東京井洸堂發行

(三二) 人道

明治四十年 積文社發行

(三三) 靜思録

明治四十一年 發行所右に同じ

(三六) 同朋心得十箇條講話 多田鼎註

明治四十二年 東京 無我山房

(三七) 安心錄

大正元年 文成社發行

(三八) 向上論

大正三年 東亞書房發行

(三九) 道の話

大正三年 東京丁未出版社

(四〇) 人の道

大正七年 佛教學會發行

(四一) 佛教より見たる人の一生

大正十四年 中央出版社

第三詩文に關するもの。

(四二) 航西詩稿

非賣品
明治二十六年五月

(四三) 笠原遺文集

明治三十二年 東京博文堂

南條先生の著書解説

(四四) 先徳餘香 無盡燈第十卷第四號より連載

(四五) 毛芥遺稿 非賣品

明治四十三年三月

第四傳記に關するもの。

(四六) 忘れ得ぬ人々 合掌所載

大正十年

(四七) 南條文雄自叙傳

大正十三年 印度學會發行

(四八) 懷舊錄

昭和二年 東京 大雄閣發行

これらに就て解説を要するもの無きにあらざれど、あまり長編になる嫌もあり、且つ書肆の廣告をするやうになるのも考へものと思ひ總て略した。